

構成的グループ・エンカウンターを取り入れた参加型授業に対する 学生の意識と評価

曾 山 和 彦
(名城大学教職センター)

Student Awareness and Evaluation of Lectures at University that have Adopted Structured Group Encounter

Kazuhiko Soyama
(Center for Teacher Education, Meijo University)

Summary

The purpose of this study is to investigate student awareness and to evaluate lectures that adopted structured group encounter. We conducted questionnaire surveys of 178 university students. We asked students taking the teacher training course of their expectations for all lectures at the university. We also asked students about lectures that adopted structured group encounter. The results suggest that lectures that adopted structured group encounter received greater satisfaction levels than students expected. Therefore, to improve lectures at the university, it is necessary to implement interactive lectures that adopt group work.

キーワード: 構成的グループ・エンカウンター、参加型授業、期待、満足

Keywords: structured group encounter, interactive lecture, expectation, satisfaction

I 問題と目的

近年、大学評価の重要なポイントとして、「学生が期待し、満足する授業が実現できているかどうか」ということが挙げられている。全国の多くの大学は、学生による授業評価を実施し、FD (Faculty Development) 活動の一つである授業改善・向上を目指した取り組みを展開している。社団法人私立大学情報教育協会 (2008) は、協会加盟の全国私立大学343校、短期大学138校の専任教員約7万人を対象に授業改善に関する調査を実施し、その結果を「平成19年度私立大学教員の授業改善白書」としてまとめている。その中で、「授業改善に向けた今後の課題」として、特に「学習意欲を高める授業の設計 (79.1%)」、「学生の理解度に応じた授業の設計 (60%)」、「対話を重視した授業の徹底 (34.7%)」を指摘している。このように、大学教員の意識が、従来の「研究7割、教育3割」から、学生の教育、すなわち自分自身の授業改善・向上に向き始めたということは時代が求めるものでもあり、望ましいことであると考えられる。

これまでも、大学授業の改善に向けた取り組みとして、ジョンソン (1998) らによる「協同学習」の考えに基づく実践が多数報告されてきている。協同学習とは、スモール・グループを活用した教育方法であり、生徒同士が共有する目標を達成するために一緒に取り組むことにより、自分の学習と互いの学習を最大に高めようとするものである。この協同学習の考えに基づき、杉江 (2000) は、学生主体の双方向授業づくりをめざし、学生に授業をさせ、しかもフロアーの学生が理解できるような工夫を求めるという実践を展開した。出席率、自発的発言、個人的感想等の指標により、学生の積極的な授業参加がなされたということを成果として述べている。南 (2004) は「共に学び合える英語学習」として、仲間同士によるテスト答案の点検により学習成果を認め、励まし合う実践を展開した。観察を通して、

仲間同士のコミュニケーションや励ましの機会を多く受けた学生の主体的な学びの姿が多く見られるようになったということを報告している。また、関田(2005)は、集中講義に参加した300名を超える受講者に対し質問(課題)を提示し、まず個人で考えさせ、次にグループで各自の考えを検討し、必要に応じてクラス全体で共有するという流れからなる授業を展開した。その結果として、学生の能力観や学校観を問う質問紙の事前事後の変化等から、学生の学習意欲や学習態度の向上が見られたと述べている。このように、生徒・学生同士がスモール・グループとなることで、自分のためにも仲間のためにも真剣に学び合うことが可能となる協同学習ではあるが、学生の中には課題遂行のための一時的な相互交流にすら抵抗を感じる者も見受けられる。文部科学省(2008)による学校基本調査の結果、一時期減少傾向にあった全国不登校小中学生の数は、2007、2008年の2年間再び増加傾向に転じている。中日新聞(2008)は、不登校増加の原因について、文部科学省による各都道府県への聞き取り調査結果として、「人間関係をうまく構築できない子どもが増えた」という回答が93%を占めていると報じている。このような状況を鑑みると、大学においても対人関係能力に乏しい学生が増えているのは自明のことであると思われる。現在、小中学校現場における児童生徒のよりよい人間関係構築に向け、実践及び研究が盛んに行われているものとして構成的グループ・エンカウンター(Structured Group Encounter=SGE、以下SGEとする)が挙げられる。SGEとは、心理的な課題であるエクササイズの体験と事後の仲間同士によるシェアリング(分かち合い、振り返り)を通して、集団内のリレーション及び個々の自己発見を促進することをめざす、集団カウンセリングの一技法である。「構成的」の名が示すとおり、リーダーが時間、人数、課題等の「枠」を提示しながらグループ活動を展開することから、時間割に沿って日常生活が流れる学校現場にはなじみやすく、「教師が使えるカウンセリング」として注目度の高い技法である。

本研究では、先行の報告や研究の知見を受け、現在、大学教員に期待される授業改善に視点を当てる。具体的には、協同学習の知見である「自他の学習を最大に高めるスモール・グループ」による活動を核とし、そのグループ活動をよりスムーズに展開するための技法としてSGEを取り入れた参加型授業(以下、「SGE活用授業」とする)を実施する。その上で、大学授業全般への期待度およびSGE活用授業への満足度についての質問紙調査を行い、SGE活用授業に対する学生の意識と評価を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 方法

1. 調査時期

2008年7月。SGE活用授業13回目の授業時間に調査を実施。

2. 調査対象

教職課程科目のSGE活用授業の出席者(1、2年生)187名。人数の内訳は、「教職入門」(1年生48名)、「学校教育相談」(2年生115名)、「特別活動の研究」(2年生24名)の授業中に質問紙を配布し、10分間の回答時間後、回収した(回収率100%)。項目に記入漏れのあるデータを除き、178名分を分析対象とした。内訳は、男女別では男子122名、女子56名であった。また、学年別では、1年生40名、2年生138名であった。

3. 調査内容

(1) 大学授業全般に対する期待度とSGE活用授業に対する満足度：全15項目である。具体的な質問項目は、二宮他(2004)によって作成された「大学授業観尺度」22項目の中の第1因子である「授業に対する積極的な要望」11項目、及びA大学FD委員会による授業満足度アンケート15項目を参考に作成されたものである。1つの質問に対して5件法(期待度：「全く期待していない」から「大いに期待している」まで、満足度：「全くそう思わない」から「大いにそう思う」まで)で回答を求めた。得点が高いほど期待度、満足度に対する自己評価が高いものとした。

(2) SGE活用授業の利点：全10項目である。具体的な質問項目は、学生に対し、各授業後に毎回記述を求めている「授業感想・振り返り」の内容を参考に作成されたものである。1つの質問に対して5件法(「全くそう思わない」から「大いにそう思う」まで)で回答を求めた。得点が高いほどSGE活用授業の利点に対する自己評価が高いものとした。

(3) SGE活用授業の問題点：全6項目である。具体的な質問項目は、学生に対し、各授業後に毎回記述を求めている

る「授業感想・振り返り」の内容を参考に作成されたものである。1つの質問に対して5件法（「全くそう思わない」から「大いにそう思う」まで）で回答を求めた。得点が高いほどSGE活用授業の問題点に対する自己評価が高いものとした。

4. SGE活用授業の構成

SGEとは、グループの力を最大限に活用し、個々の人間的成長の促進をねらった援助技法である。國分他（2000）は、SGEについて「エクササイズを介してリレーションをつくり、リレーションを介して自己発見、他者発見、人生発見を促進する教育的色彩の強い援助技法である」と述べている。そのSGEを取り入れた本研究における参加型授業（SGE活用授業）の主な流れをTable 1に示した。まずはじめに、SGEのショートエクササイズを活用してグルーピングを行った。グループの人数は当日の授業内容によって異なるが、概ね2～6名で構成した。次に、隣同士で学部、名前を確認後、前時に学んだ知識に関する質問（課題）を投げかけ、二人で話し合いながら答えを確認させた。二人で確認した後に順番に発表させ、質問に関する答えをクラス全体で確認するようにした。その後、本時の内容に関する知識・理論の講義を行った後、関連するSGEエクササイズにグループで取り組むようにした。この時、グループメンバーの名前を毎回確認することを徹底した。また、エクササイズの中での個々の気づきをクラス全体で共有できるよう、随時、発表させるようにした。最後に90分間の授業を振り返り、感想、気づき、質問などを個々に振り返り用紙（Table 2）に記入・提出させて終了とした。なお、SGEを取り入れる授業である以上、SGEの骨子であるエクササイズとシェアリングが時間内にバランスよく組み込まれるように配慮した。

Table 1 SGE活用授業（90分）の主な流れ

時間（分）	学習活動	指導上の留意点
5 10	本時の学習について見通しをもつ ペアをつくる	・ 本時の学習についての「ねらい」、「内容」について簡潔に伝える。 ・ いろいろな学生同士がかかわりをもてるよう、「パスデーライン（非言語による誕生日整列）」、「フリーウォーク（非言語による1分間の自由歩行）」等、SGEのショートエクササイズを用いたり、座席の前後左右の学生同士をシャッフルしたりして、ペアをつくるようにする。
10	前時の学習内容の復習をする	・ 前時の学習内容から複数の課題を提示し、ペアで話し合いをしながら回答を導くよう、働きかける。（課題例：「いじめの4層構造とは何か？」等）
60	本時の内容について知る・理解する	・ 重要事項については、記憶の定着が図りやすいよう、配付資料内に空欄部を設定し、自ら書き込む書式の工夫をする。 ・ 学生が資料に記入している際には、机間巡視を行い、寝ている学生、メールをしている学生等に声をかけるようにする。 ・ 知識や理論に関する説明後、それらの定着に向け、ペアあるいは前後の4人組、6人組等によるSGEを活用した演習を随時行うようにする。（例：アサーション理論について説明後、ペアによるロールプレイを実施。その後、ペアによるシェアリングを行い、さらに前後4人でのシェアリングに広げる等）
5	本時の学習を振り返り、シートに記入する	・ 本時の学習についての気づき・感想・質問等を記入するシートを用意する。

Ⅲ 結果

1. 大学授業全般に対する期待度

大学授業全般に対する学生の期待度は、各項目の平均得点（レンジ1～5点）を見ると、全15項目において、平均得点がレンジ中間点（3点）より高かった（Table 3）。それゆえに、学生は大学授業全般に対し、期待をもって臨んでいることが示唆された。特に、「自分の将来に役立つ授業（4.43点）」、「教養や専門性を身につけられる授業（4.30点）」、「新しいことを学べる授業（4.30点）」など、いわゆる「実践的な内容」に関連する項目について期待していることが示された。

2. SGE活用授業に対する満足度

本研究で提示したSGE活用授業に対する学生の満足度についても、期待度同様、全15項目においてレンジ中間点

Table 2 講義振り返りシート (学生による記入例)

(人間) 学部	(2) 年次	
学生番号 (0700000)	氏 名 (○○ ○○)	

◇講義名 「特別活動の研究」

◇本時のテーマ 「新しいキャリア理論：ハプンスタンス・アプローチ」

◇講義日 平成20年○月○日 (土) 1 限

1. 前時の確認・チェック (パートナー名：○○さん)

<復習課題：キャリアガイダンスの6つのステップとは何か？>

1. 個性理解 2. 職業理解 3. 啓発的経験 4. カウンセリング 5. 方策実行 6. 追指導

2. 本時の振り返り (演習時のパートナー名：○○さん、○○くん、○○さん)

(1) 気づいたことや感じたこと

・今日の授業で習ったハプンスタンス・アプローチはとても納得できるものだった。確かに、人生には「たまたま」とか「偶然」の出来事や出会いによって決まることが多いと思った。でも、待っているだけではいけないので、とにかく「動こう」と思った。グループワークの「人生ハウマッチ？」では、皆が大切に思っているものが何なのか、自分は何を大切に思っているのかなどをあらためて知ることができた。皆のことは普段聞くことがないので、それを聞いたことがよかった。人それぞれだなあと思うと同時に、生きているって楽しいなと思った。

(2) 質問や要望

・ハプンスタンス・アプローチについて参考図書があれば教えてほしい。

Table 3 大学授業全般に対する期待度、SGE 活用授業に対する満足度得点平均

	期待度 (N=178)	満足度 (N=178)	t 値
1. 聞くことによって理解が深まる授業	4.01 (0.89)	4.38 (0.71)	-5.14**
2. 教師の熱意や意欲が感じられる授業	4.02 (0.95)	4.70 (0.51)	-9.46**
3. 要領よく進められる授業	4.05 (0.96)	4.44 (0.70)	-4.86**
4. 集中しやすい雰囲気づくりのなされた授業	4.01 (1.06)	4.40 (0.76)	-4.39**
5. 教師の話し方が明瞭で聞き取りやすい授業	4.30 (0.91)	4.64 (0.62)	-4.64**
6. 教養や専門性を身につけられる授業	4.30 (0.83)	4.63 (0.53)	-5.34**
7. 板書や資料などの準備が十分になされた授業	4.07 (0.93)	4.60 (0.67)	-6.69**
8. ついつい聞き入ってしまう内容の授業	4.22 (1.07)	4.34 (0.76)	-1.43 n.s.
9. 学生の理解度が確認されながら進められる授業	4.03 (1.10)	4.13 (0.85)	-1.12 n.s.
10. 学生が参加できるように工夫された授業	3.80 (1.06)	4.75 (0.55)	-11.19**
11. 自分の将来に役立つ授業	4.43 (0.82)	4.64 (0.58)	-3.08**
12. 目標、ポイントが明示された授業	4.11 (0.90)	4.45 (0.73)	-4.93**
13. シラバスに示された内容が満たされた授業	3.07 (0.95)	3.86 (0.99)	-10.65**
14. 成績評価の基準が明示された授業	3.86 (0.92)	4.47 (0.74)	-8.33**
15. 新しいことを学べる授業	4.30 (0.72)	4.64 (0.59)	-6.54**

() 内は標準偏差 ** $p < .01$

(3点)よりも高く、学生はSGE活用授業に満足していることが示唆された (Table 3)。特に、「学生が参加できるように工夫された授業 (4.75点)」、「教師の熱意や意欲が感じられる授業 (4.70点)」など、いわゆる「教師の熱意・意欲」に関連する項目について満足していることが示された。

3. 大学授業全般に対する期待度とSGE活用授業に対する満足度の比較

大学授業全般に対する学生の期待度とSGE活用授業に対する満足度得点平均値の差について、対応のある t 検定を行った (Table 3)。その結果、全15項目において、満足度得点は期待度得点を上回っていることから、SGE活用授業は学生の期待に十分に込んでいる授業であることが示唆された。また、全15項目中、「ついつい聞き入ってしまう

内容の授業」、「学生の理解度が確認されながら進められる授業」の2項目を除き、「聞くことによって理解が深まる授業」、「教師の熱意や意欲が感じられる授業」などの他の13項目については、統計的な有意差が認められた。このことは、SGE 活用授業が、学生の大学授業全般に対する期待度を超えて高い満足度の得られる授業であるということを示すものであった。

4. SGE 活用授業の利点と問題点

はじめにSGE 活用授業に対し、学生が何を利点として感じているかということでは、各項目の平均得点（レンジ1～5点）を見ると、全項目において、平均得点がレンジ中間点（3点）より高かった（Table 4）。質問項目は、学生の振り返り記述からの抜粋であるため、肯定的な評価が示されるのは予想ができたが、中でも利点として捉えているのは、「将来使える実践的な技法を覚えられる（4.47点）」、「自分と異なる考えに触れ、新たに気づくことがある（4.38点）」などであった。これは、SGE を組み込んだグループワーク等の内容構成が評価されてのことであると思われる。一方、SGE 活用授業に対し、学生が何を問題点として感じているかということでは、各項目の平均得点（レンジ1～5点）を見ると、6項目中5項目については、平均得点がレンジ中間点（3点）より低かった（Table 5）。この質問項目も、学生の振り返り記述からの抜粋であり、当初、SGE 活用授業に対する否定的な評価も複数予想されたが、「よく知らない人とグループになると気まずい（3.23点）」という1項目のみ否定的な評価という結果であり、ほぼ問題点を感じるものがない授業であることが示唆された。

Table 4 SGE 活用授業の利点得点平均

	利点 (N=178)
8. 将来使える実践的な技法を覚えられる	4.47 (0.68)
2. 自分と異なる考えに触れ、新たに気づくことがある	4.38 (0.76)
3. 学生同士のコミュニケーションが自然にとれる	4.30 (0.80)
6. 知識だけではなく人とのコミュニケーションのとりかたなどの社会性を学べる	4.28 (0.79)
1. 楽しく参加できる	4.28 (0.88)
10. 時間いっぱい集中できる	3.88 (0.93)
7. 児童生徒の身になって考えられるようになる	3.88 (0.91)
9. 理論・知識が記憶に残りやすい	3.81 (0.94)
5. 自然と笑顔になれる	3.78 (0.99)
4. 不安や緊張が緩和される	3.70 (0.96)

() 内は標準偏差

Table 5 SGE 活用授業の問題点得点平均

	問題点 (N=178)
2. よく知らない人とグループになると気まずい	3.23 (1.14)
6. 仲のよい友人とグループになるとふざけてしまう	2.82 (1.12)
3. グループワーク等のために、席を動くのは面倒	2.74 (1.30)
1. グループワーク等の時間が多いと理論・知識を得る時間が少なくなる	2.74 (1.01)
4. 相手のことも考えながら活動するため、自分のペースで授業に向かえない	2.56 (1.04)
5. 大学生が、小中高生対象のエクササイズの体験をしても無意味である	1.63 (0.82)

() 内は標準偏差

IV 考察

1. SGE 活用授業に対する学生の意識と評価

本研究の結果から、SGE 活用授業に対する学生の意識と評価に基づき、大学教員に期待される授業改善について考察を加えたい。

現在、大学および学生に対する世間一般の評価として、「大学はレジャーランド化している」、「学生は学ぶ意欲を

喪失している」等、否定的な声が多く聞かれる。平成19年度私立大学教員の授業改善白書(2008)においても、全国私立大学334校、21797名の教員の声として、「基礎学力がない(56.3%)」、「学習意欲がない(37.2%)」等の学生の問題点が挙げられている。これに対し、河地(2005)は、首都圏の大学生2104名に対するアンケート調査とインタビュー調査内容から大学生の実像を明らかにしている。例えば、「何を重点に学生生活を送っているか」という質問に対し、「授業・ゼミ」、「資格取得のための勉強」と答えた学生は全体の54%である。また、「課題・宿題をどれくらいの頻度でやっていくか」という質問に対し、「だいたいやっていく(4回に3回以上)」と答えた学生は70%である。これらのことから、世間一般の評価と異なる、「もっと勉強したいと思っている」大学生の姿が浮かび上がってくる。また、河地(2005)は、授業改善に対する学生の意識調査の結果から、「教員が学生と授業外でもコミュニケーションをとる」、「討論・プレゼンを含めた学生参加型の授業にする」等の要望がいずれも約8割の学生から示されたことに伴い、「教員が一方的に話し、学生はノートをとるという形式ではなく、学生が発言し、質問し、自分の考えを形作ってゆく授業にする」、いわゆる参加型授業の導入に向けた提言等を行っている。本研究におけるSGE活用授業も、河地(2005)が提言する参加型授業の形態をとっており、質問紙調査に対する学生の自己評価結果から、学生の期待度を大きく上回る満足度が得られた授業であることが明らかになった。人間関係づくりのための効果的な技法であるSGEを核とした内容構成により、仲間同士によるグループ活動がスムーズに行われ、先行研究である杉江(2000)、南(2002)、関田(2005)の協同学習に基づく実践同様、学生からの評価の高い授業が展開できたのではないかと考えられる。SGE活用授業の利点と問題点に関する学生の自己評価を見ても、「自分と異なる考えに触れ、新たに気づくことがある」、「学生同士のコミュニケーションが自然にとれる」など、グループ活動に対する肯定的な評価がほとんどであり、学生自身が仲間と共に学び合う授業形態に満足している様子がうかがえる。なお、学生の自己評価では唯一否定的な数値を示したのは「よく知らない人とグループになると気まずい」の1項目であるが、これに関しては、授業を重ねるにつれ、グループ活動を通して知り合いが増えてくることであり、大きな問題として取り上げる必要はないと思われる。本研究結果が示したように、学生の大学授業全般に対する期待度の高さは、河地(2005)の示した「もっと学びたい大学生」の姿に重なるものであろう。そして、本研究及び先行実践が示したグループ活動を取り入れた参加型授業に対する学生の満足度の高さは、今後の大学における授業改善に向けた一つの示唆となるのではないかと考えられる。

2. 今後の課題

本研究の今後の課題について2点述べたい。第1点は授業への期待度及び満足度を測定する尺度の問題である。本研究で使用した尺度は、二宮他(2004)の研究知見、A大学FD委員会による授業満足度アンケート項目を参考に作成したものである。今後、学生からのインタビューなどにより、期待度、満足度に関する項目を追加した上で、因子分析を行うなどの項目検討が必要であろう。第2点は参加型授業の効果をより明確に示すという問題である。グループ活動を通じた自己への気づき、他者とのコミュニケーション等についてはその促進効果が示唆されたと考えられるが、今後は学習内容の理解度及び定着度についても定期テスト得点の変容等により、確認をしたいと考える。

参考文献

- ジョンソン, D.W・ジョンソン, R.T・ホルベック, E.J・杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤(訳) 1998 『学習の輪—アメリカの協同学習入門—』二瓶社.
- 河地和子 2005 『自信力が学生を変える—大学生意識調査からの提言』平凡社.
- 國分康孝・國分久子・片野智治・岡田弘・加勇田修士・吉田隆江 2000 『エンカウンターとは何か—教師が学校で生かすために』図書文化.
- 文部科学省 2008 『学校基本調査』
- 南紀子 2004 「実践事例2～共に学び合える英語学習」杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ(編)『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部、86-95頁.
- 二宮克美・桑村幸恵・稲葉小由紀・山本ちか 2004 「大学生の授業に対する意識(1) 大学授業観と大学適応感との

関連」『日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集』13、146-147頁.

杉江修治 2000 「学生主体の双方向授業づくり」『中京大学教養論叢』第40巻第3号、189-198頁.

杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ（編） 2004 『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部.

関田一彦 2005 「集中講義『教育心理学』が受講者の心理的態度に与える影響」『創価大学教育学部論集』第56号研究ノート、71-78頁.

社団法人私立大学情報教育協会 2008 『平成19年度私立大学教員の授業改善白書』

中日新聞 2008 「不登校小中生12万9千人」8.8朝刊